

=====

CONTENTS

- 巻頭言
- 第66回全国学術大会のご案内
- 全国理事会のお知らせ
- 第66回全国学術大会出欠席返答用はがきについて
- 追悼 加藤弘之先生の晩年と「声」
- 追悼 歩平先生を偲んで
- 連載 在外研究記 第4回
- 事務報告
 - 2016年第2回常任理事会議事録
- 地方部会報告
 - 2016年度関西部会大会
 - 2016年度西日本部会研究集会
- 「加藤弘之『中国経済学入門』との対話（三学会共同企画）」のご案内
- 日本現代中国学会事務局あて寄贈図書・雑誌

=====

■ 巻頭言 第66回全国学術大会によせて

田島英一（慶應義塾大学）

本大会は、「飛躍的な経済成長を遂げている社会が直面しているリスク」という、文明史的スケールのテーマを掲げている。具体的な研究状況の紹介はしにくいので、恐縮ではあるが、個人的な記憶の話から始めさせていただきたい。

第一の記憶は、ある中国人神父の発言だ。「今我々が直面している問題の多くは、過度な世俗化に起因する。こうした危機感は、中国共産党も共有している。共産党と教会は、共闘関係にある。」彼は、中国天主教愛国会の幹部という肩書を持ち、中国教会においては、名の知れた人物である。独自のスタンスで、いわゆる「地下教会」に浸透、その「地上化」を推進してきた。党、政府から高い評価を得るばかりではなく、ローマ法王庁からも称賛されている。しかし、そんな彼の目から見て、「地上」「地下」の融和は技術的問題に過ぎず、むしろ「過度な世俗化」という近代化の有様こそ、教会に対する真の挑戦なのである。

第二の記憶は、南開大学で開催された、某シンポジウムでのやりとりである。ある研究者が、西洋の政治制度や文化がいかにも矛盾をかかえているか、中華文明がいかにも優秀で「全面的西洋化」がいかにも愚かかを、言を尽くして述べ立てていた。発表後、一人の女子学生が挙手し、こう質問した。「先生は今日、スーツとネクタイをおめしですね？」とたんに、会場から失笑がもれた。

最近、様々な場で竹内好の再考が進んでいる。竹内によれば、中国の近代化は、日本のよう

な「根が浅い」近代化ではなく、むしろ抵抗と内発性を備えた試みであった。竹内が魯迅や毛沢東から読み取った、もうひとつの近代化の可能性は、大躍進においても文化大革命においても、様々な研究者、言論人によって語られてきた。80年代以降も、たとえば郷鎮企業を内発的発展とする言説が存在した。しかし今日の中国に向き合っただけでなく、抵抗と固有の内発性を読み取るような勇気を持つ研究者が、はたしてどれほどいるであろうか。

90年代から一気に加速した市場経済化は、空前の経済成長をもたらすとともに、権力と市場の癒着、環境破壊、「無産者階級政党」の非無産者化、拝金主義の蔓延等、様々な矛盾を生んだ。北京でチベット仏教の活仏たちが学ぶ蔵語系高級仏学院には、すさまじい「進歩」のきしみの中で不安を覚えた北京市民たちが、「たとえ活仏の袈裟に触れただけでも救われるのではないか」との思いで、押しかける。中国共産党は、はたして「疎外」(K.マルクス)の解決者なのか、それとも推進者なのか。西洋に「啓蒙的理性の墮落と道具的理性の過剰」(批判理論)という反省をもたらした、「宗教の復讐」(G.ケペル)という反作用を生んだ近代化が、結局は中国に対しても、全く同じ問いを突きつけているように思えてならない。

しかし、内発性はおろか、体制維持の立場から社会の自発性すら条件付きでしか認められない中国において、過剰な道具的理性への「緩和剤」には、欽定版(例:江沢民の「愛国主義」、胡錦濤の「八榮八恥」、習近平体制の「社会主義核心価値」等)が多い。そして、欽定「緩和剤」には、その薫陶を受けてきたはずの女子学生さえ、冷水を浴びせる。正直、過度な世俗化に立ち向かう教会にとって、中国共産党が頼もしい共闘者であるとは思えない。

ともあれ、近代化一般まで視座に入った時、ようやく、現代中国をめぐるアポリアをとくカギが、ヒントだけでも見えてくるようにも思う。「問題群」のタコツボにこもらない活発な議論を、本大会に期待したい。

■第66回全国学術大会のご案内

会員各位

2016年の日本現代中国学会全国学術大会を、10月29日(土)と30日(日)の日程で、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスにおいて開催することになりました。

今年の全国大会の共通論題は「リスクで測る中国の諸相」です。文化大革命を越えて市場経済化の道を歩み、急速かつ持続的な経済成長を実現した中国の国内社会は、多種多様な問題に直面しています。また経済成長にともなって国力が増大した中国の対外行動は、既存の国際秩序をめぐる様々な議論を喚起し、国際社会の関心を集めております。本共通論題の目的は、こうした中国をめぐる生起している政治、経済、社会文化、対外行動をめぐる諸問題を「リスク」という概念をキーワードとして整理することによって、中国の多様性を可視化し、今日、そしてこれからの中国を理解するための手掛かりを参加者で共有することにあります。

なお、本共通論題の目的は、「今日の中国国内外で生起している『問題群』がもたらす脅威」という視点で中国を展望することではありません。「問題群」を「市場経済化の道を歩むことによって飛躍的な経済発展を遂げている社会が直面しているリスク」と定義します。「問題群」を中国だけが直面している特殊な問題であると位置付けるのではなく、それを近代化の道を歩む(歩んできた)人類社会が体験する(体験してきた)課題として観察します。また「リスク」という単語の説明の仕方も多様であることに留意します。本共通論題では報告者の専門分野に

引きつけて「リスク」を定義することが期待されています。

こうした視点を示すことで、私たちは中国を「中国」から少し距離を置いて観察しながら、中国の多様性を可視化させることが可能になると考えます。もちろん本共通論題は「理論」や「モデル」という大鉦で、中国をばさばさっと切り刻むことを意図しているのでもありません。あくまでも「もの差し」に過ぎません。こうした思いを込めて、共通論題の題目を「リスクで測る中国の諸相」としました。

共通論題の他にも、初めての試みとして現代韓国朝鮮学会との合同企画のほか、歴史、社会・文化、政治、農業・環境、経済といった分野に関する分科会報告、自由論題報告が予定されております。初秋の美しい湘南藤沢キャンパスで、皆様のご参集をお待ち申し上げます。

記

日時：2016年10月29日（土）12時より受付開始、30日（日）9時より受付開始

場所：慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス

〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤 5322

キャンパスマップ http://www.sfc.keio.ac.jp/about_sfc/campus_map.html

交通アクセス <http://www.sfc.keio.ac.jp/maps.html>

小田急江ノ島線・相鉄いずみ野線・横浜市営地下鉄ブルーライン「湘南台」駅下車

同駅西口よりバス「慶応大学」行き約15分「慶応大学本館前」下車

JR東海道線「辻堂」駅下車

同駅北口よりバス「慶応大学」行き約25分「慶応大学本館前」下車

参加費：1000円（設備費・資料代等）

弁当費：30日（日）は、キャンパス内食堂が閉店です。昼食のためお弁当の予約を承ります。1000円です。

懇親会費：一般会員4000円、学生3000円

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス実行委員会

田島英一（実行委員長）、加茂具樹、鄭浩瀾

お問い合わせ先

〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤 5322

慶應義塾大学総合政策学部 加茂具樹研究室気付

E-mail: [genchu2016\[at\]gmail.com](mailto:genchu2016[at]gmail.com)

（[at]を@に変更して下さい）

*大会の詳細につきましては別送のプログラムおよび学会ホームページをご覧ください。

http://tomoki.sfc.keio.ac.jp/james_2016_annual_meeting.pdf

■全国理事会開催のお知らせ

下記の要領で全国理事会を開催いたします。理事の方はご参集ください。

日時：10月29日（土）10時30分～

■第 66 回全国学術大会出欠席返答用はがきについて

学会事務局から送付されております表題はがきに記載された大会プログラムに誤りがあります。正しくは学会ホームページに掲載されているとおりです（下記、URL）。どうぞあらためてご確認ください。

URL : http://tomoki.sfc.keio.ac.jp/jamcs_2016_annual_meeting.pdf

■追悼 加藤弘之先生の晩年と「声」

梶谷 懐（神戸大学）

8月30日、加藤弘之先生が亡くなられた。61歳の誕生日を目前にした早すぎる死であり、その訃報に接した時、急なことで驚かれた方も多くおられたかもしれない。しかし、ゼミなどで日常的に接している私たちにとっては、先生の病状が少しずつ進行していることは明らかだった。私たちにとってその事実はどうすることもできず、むしろそれを当たり前のこととして接してきたのだが、亡くなられた今、最晩年の先生がどのようにして病と闘いながら研究に向かっておられたのか、その「思い」に改めて向き合わなければならないような気がしている。

2003年ごろ、甲状腺がんの手術を受けられたことは聞いていたが、その後の経過は良好で、すっかり寛解されたものと安心していた。しかし、2006年から一年間、北京の日本大使館に公使として赴任され、帰国されたころから病気が再発し、目に見える形で少しずつ悪化していった。それは何よりもお話しする際の声がつかうようなことで、実際にお目にかかった方々には伝わったことと思う。

先生の病状が決定的に悪化したのは、2年前の9月に科研のプロジェクトチームで四川省の農村に調査旅行に行った折のことだった。現地に着いた日の歓迎会の席で、「体調が悪く声が出ないので、向こうの先生方とのやり取りはお願いします」とメモを渡された。その当時は一時的に体調を悪くされただけのように軽く考えていたが、それ以降、加藤先生に往年の「声」が戻ることはなかった。このとき、体調を押して参加された農村調査に基づく都市化政策の分析は、遺著となった『中国経済学入門』第3章に活かされている。

その頃から、ゼミや研究会の席では文書読み上げソフト「詠太」を使い、女性の機械音を通じて先生の発言を聞く、というのが私たちの習慣になった。ゼミで大学院生が報告を終わり、一通り質疑応答が行われている間に、先生のカチャカチャと忙しくキーボードを打つ音が聞こえる。キーボードの音がやむと、そろそろだな、と思って発言を待つのだが、パソコンとスピーカーの接続が悪く、すぐには文章の読み上げが始まらないこともしばしばだった。そんな時、私たちは少し張り詰めた静寂の中で読みあげの「声」を待つことになる。限られた時間の中で簡潔にまとめられた先生のコメントは、特に報告者が理解不足から未熟な報告をした時には、かなり厳しい印象を与えることもあった。だが、本当はもう少し冗談を交えながら、柔らかい口調でコメントをされたかった時もあったに違いない。

昨年9月、やはり同じ科研のメンバーによる研究合宿で淡路島に行った後の先生のメールには、次のような言葉があった。

「淡路合宿お疲れ様でした。1日目しか参加できなかったですが、おもしろい報告と討論ができ、充実していたと思います。

そのあと、酒を飲みながらうだうだ議論するのが、本当に好きだったのですが、それができなくて、なんだか人生の楽しみの相当部分がなくなったようで本当につまらない。健康第一ですね。」

これは恐らく先生の本音であったろう。その少し前から食べ物の呑み込みも苦しくなり、胃ろうの手術を受けられたと聞いた。美味しいものが食べられなくなることは健啖家であった先生にはもとよりつらいことであったろうが、やはり自由闊達なおしゃべりができなかったことが最も悔しいことであったに違いない。

ちょうどその合宿の日が先生の誕生日に重なっていたので、研究仲間からのサプライズのプレゼントとして、リュックを背負って万里の長城を登っていく（大学時代にワンダーフォーゲル部に所属されていたため）ところを漫画チックに描いた似顔絵を業者に依頼し、プレゼントしたのだが、思いのほか気に入っていただけたようで、ご葬儀の際にも遺影と並んで飾っていただいた。思えば、先生の頭の中でのご自身のイメージは、ずっとあの絵のように中国のあちこちを自由に歩き回っている姿のままだったのだろう、と思う。

病と闘いながら文字通り最後の力を振り絞って書かれたのが、遺著となった『中国学入門』である。そこに「若き中国研究者に」という、ご自分に残された時間が少ないことに向き合いつつ書かれた文章が収められている。経済が専門でない方でも、同書を図書館で探してでも、この文章だけでも読んでいただきたい。そこに、こんな一節がある。

「まずは一つの産業や一つの研究領域を深めると言うのは、賢い選択である。しかし、決してそこに埋没してはならない。（中略）個別の実証研究を続けながら、全体としての中国を見つめる視点をどこかに持ち続けることが重要だと思う。（中略）中国研究を志す若手の研究者諸君よ！決して個別実証研究に埋没することなく、「異邦人のまなざし」を持ち続け、中国人の中国研究とは異なる、日本人の中国研究の意義を世界に向けてアピールできるような創造的な研究を大いに期待している」。

なぜ自分は中国研究を一生の仕事として選んだのか、そして、人生の終わりを迎えた時に自分のやるべき仕事をやり切ったと言えるのか、この文章から伝わる先生の心の「声」は、いつまでもそのことを問いかけ続けるだろう。

私も、これまでにいくつか拙い著作をものしてきたが、加藤先生の業績に直接言及したことは、実はそれほど多くない。あまりに近すぎて、影響から逃れたいという気持ちがどこかにあったのかもしれない。しかし、遅すぎたのかもしれないが、先生が亡くなられた今、その学問をどのような形で受け継ぎ、その上で自分自身の道を行くべきなのか、その課題によりやく向き合えるような気がしている。思えば、私は既に「若い」と言われるような年齢はどうに過ぎてしまった。それでも、すでに述べたような意味で、「若き中国研究者に」という文章は、これ

からの私のためにこそ書かれたのだ、という気がしてならない。その思いを噛みしめながら、今後も研究者としての道を歩んでいきたい。

■追悼 歩平先生を偲んで

山田辰雄（慶應義塾大学名誉教授）

歩平先生ご逝去の報に接したのは8月14日朝のことでした。先生の思い出にふけり、一日が過ぎました。尊敬すべき良き友人を失い、まことに悲しい一日でした。心からここに悼痛の意を表します。

歩平先生の研究は中国東北地域における日本の侵略の実証的研究から始まりました。社会科学院近代史研究所所長に就任されてから先生の研究は近代日中関係全体に及び、開花しました。先生は自らの立場を崩すことなく、近代史研究所所長として日中両国の研究者を励まし、組織することに大きく貢献されました。われわれ研究者は事実の解明に努力します。しかし、事実の解明自体は必ずしも日中両国の国民の相互理解を促進するものではないことに気付かなければなりません。時には政治家が解明された事実を相手を批判するために利用するからです。歩平先生は解明された事実に基づいていかに両国民の相互理解と和解を促進するかに尽力されました。私は先生からこのことを学びました。その意味で、歩平先生はわれわれの良き理解者でありました。

長年にわたる歩平先生と私との交流は、1998年に慶應大学で開催された日中関係の軍事史に関するシンポジウムに始まりました。以後毎年日中両国で数えきれないほどの会議や交流の場で挨拶を交わし、議論をしました。しかし、それ以上に貴重な経験は日中関係が困難にぶつかった時、長時間にわたり二人で意見を交換する機会を持ったことでした。2010年10月22日のことでした。早稲田のリーガローヤルホテルで数時間話し合いました。それは9月に中国漁船が尖閣諸島付近で日本の海上保安庁の船と衝突した事件の直後でした。2012年11月に私は近代史研究所に招かれて中国を訪問しました。この時も歩平先生には一日を費やして北京近郊の日中関係に関連した歴史の遺蹟を案内していただきました。時は中国共産党18全大会開催中であり、日本政府が尖閣諸島を購入した直後のことでした。このような例は枚挙にいとまがありません。先生とは時には感情をあらわにしながら困難な日中関係について話し合いました。それはお互いの理解に大いに貢献しました。私の中国語に比べてはるかに流暢な歩平先生の日本語はこの交流のために大変役立ちました。

私は、時には香山か箱根に宿をとり、日中両国の資料を持ち寄り、論争のある日中関係史の問題を先生と共に論じることを夢見ることがありました。先生亡き後の今日ではこの共同作業は残されたわれわれの仕事になってしまいました。歩平先生の最近の健康状態を聞き、私は9月上旬にお見舞いのため北京を訪問する準備を進めていました。今となってはこの計画は実現しなかったわけで、誠に残念でなりません。

2016年9月4日

（この文章は、歩平先生逝去の直後に中国社会科学院近代史研究所に送った追悼文に若干の修正を加えたものである。）

2014年3月までの五か月の間、所属する大学の留学制度でサンフランシスコの近郊に位置するカリフォルニア大学バークレー校（UCB）に滞在した。UCBでは訪問学者として東アジア研究所（INSTITUTE OF EAST ASIAN STUDIES）に籍を置いたが、普段はもっぱら、院生時代にも訪れたことがある同校のエスニック・スタディーズ部門の図書館に通い、アメリカ発行の古い中国語新聞を読み耽る日々を過ごしていた。というのも、同校はエスニック・スタディーズのフィールドにおいて全米でもっともレベルの高い大学の一つであり、とくにアメリカ最大のチャイナタウンがサンフランシスコにあるため、現地発行の古い中国語新聞は、たいがい図書館に所蔵されている。北米における中国系移民の映画活動について調査する私にとって、まさにこの上なく完璧な環境であった。

図書館の地下にあるマイクロフィルムの閲覧室で、1920年代から1940年代の新聞を映し出すモニターと毎日睨めっこしているうちに、80年以上前の中国系移民の生活ぶりが如実に目に浮かんできた。1882年から1943年まで続いていた「中国系移民排斥法」による制限で、中国系移民はアメリカ国籍を取得できず、中国にいる家族をアメリカに呼び寄せることも困難だったため、中国系移民のコミュニティは長い間、男性独身社会（Bachelor Society）と呼ばれていた。新聞の現地ニュース欄で、初老の独身男性が自力で病院に辿りついた直後に衰弱死したなどの記事を目にすると、故郷から遠く離れ、異境の地で孤独に暮らした移民たちを不憫に思わずにいらなくなる。

薄暗い図書館から一步出れば、カリフォルニアの燦々とした太陽の下で様々な肌の色をした学生たちが楽しそうに喋りながらキャンパスを歩いている。時にはタイムスリップしたような気分すらなる。中国系移民が明らかな差別を受けていたあの時代から80年以上も経った今日のサンフランシスコでは、人種構成が多様でアジア系住民も多く、一般に全米で最も差別が少ない地域と言われている。近所の日本スーパーでは、納豆と味噌はそれぞれ10種類以上もあり、日本の大手スーパーにも負けない品揃えに驚いた。中国系の住民がとくに多いため、毎年、春節を祝う市民総動員のパレードが大々的に行われるし、テレビをつければ、有料の衛星放送ではなく無料の中国語チャンネルもある。日本での暮らしを不便に感じたことはなかったが、それでもここアメリカの西海岸は日本よりも心理的距離を近く感じる時があった。半世紀以上前のかつてのひどい状況が分かっているからこそ、「さすが移民の国だね」という一言で簡単に片づけることができない。この居心地の良さは、相互の多様性が認められ、受け入れられる安心感から来たものであり、この80年間にわたる人々の努力の賜物に違いない。

日本とくに私が住んでいる神戸の街にも、昔から数多くの中国系の人々が住んでおり、地理的にも無論アメリカより中国との距離がはるかに近い。しかし昨今の歴史認識問題によるいざこざで、今や両国民の心理的距離が途方もなく遠くなってしまったことを残念に思う、というのが留学時から今でも変わらない心境である。あと数十年の努力で日本も変わるか、どこまで変わるか、希望を捨てずに努力を続けたい。

■事務報告

□2016年第2回常任理事会議事録

日時：2016年7月16日（土）14時から16時

場所：慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス ε 館 408号室

出席者：川島真理事長、田中仁副理事長、阿古智子会計担当理事、趙宏偉関東部会代表、山本真編集委員長、高見澤磨規約・財務健全化委員会座長、加茂具樹事務局長

欠席者：北川秀樹関西部会代表、大澤武司西日本部会代表、菊池一隆東海部会代表、王雪萍広報委員長、巖善平・開催校代表（2015年）

【報告事項】

1. 会務報告

加茂事務局長より、会員数について報告があった。2016年7月14日現在で、個人会員は740名。団体会員は5団体。この間の新規入会は26名、再入会・復会者が1名、退会者が8名。

2. 会計報告

1) 会費納入率等報告（会計）

加茂事務局長より、会費納入状況について報告があった。7月14日現在、740名の会員のうち、未納なしが517名、未納1年が134名、2年が32名、3年が32名、4年が25名。

2) 中間決算（会計）

阿古会計担当理事より、会費以外の出入金に関する報告があった。また、現在学会事務局機能を業務委託している(株)大学生協事業センター・学会支援センターの事務局バックアップ機能の低下を示唆する事態が生じていることについての報告もあった。

3. 編集委員会報告

1) 『現代中国』編集状況

山本編集委員長より、『現代中国』90号目次案にもとづいて報告があった。投稿論文が16本あった。査読の結果、2本を論文として、2本を研究ノートとして掲載することになったこと、大会特集論文が4本、これにたいする討論が2本、書評が4本となった。予定通り、9月末の発行を目指して作業がすすめられているとの報告があった。なお、今年度は出版経費削減の観点から、投稿論文（論文、ノート）だけでなく、大会特集論文（依頼原稿）の「抜き刷り」の作成についても執筆者負担とした。

2) 投稿規定の修正

山本編集委員長より、論文投稿者に対して投稿先に関する注意を促す文面を投稿規定に加筆することを求める提案があった。常任理事会はこの提案を承認するとともに編集委員長からの修正文案の提案を依頼した。常任理事会は、7月19日に編集委員長から提案された文案についてメールによる審議をおこない、承認した（なお、すでに本修正を加えた新しい投稿規定が学会ホームページおよび『現代中国』第90号に掲載されている）。

4. 広報委員会報告

王広報委員長が欠席のため、加茂事務局長が事前に提出された報告を代読した。学会HP、ニューズレター等の発行状況をふくめて活動状況についての報告があった。

5. 地域部会報告

1) 趙関東部会代表より、2017年1月に開催を予定している定例研究会の日時、場所、テーマについて継続審議中であることが報告された。また関東部会の部会内経費の支出のルールについての検討と修正をおこなったとの報告があった(部会経費を関東部会の東京以外の地域における活動の活性化を目的とした費用として支出することを明記)。

2) 北川関西部会代表が欠席のため、加茂事務局長が事前に提出された報告を代読した。6月4日(土)に龍谷大学深草キャンパスにて2016年度関西部会大会が開催された。同大会では、午前中の分科会で「文学・芸術」、「歴史」、「社会・環境」が設けられて合計9の報告があったこと、午後には「流動化する中国の行方」と題される共通論題シンポジウムが設けられたことが報告された。また同日昼休みの時間にあわせて理事会が開催されたことの報告もあった。

3) 大澤西日本部会代表が欠席のため、加茂事務局長が事前に提出された報告を代読した。西南学院大学で6月18日(土)に西日本部会研究集会が開催されたとの報告があった(熊本地震発生に伴い、熊本学園大学から会場を変更しての開催)。同集会では、8つの報告がおこなわれ、出席者は25名であった。また、6月18日(土)に第1回部会理事会(西南学院大学)が、6月18日(土)に西日本部会総会が西南学院大学で開催された。

4) 菊池東海部会代表が欠席のため、事後に加茂事務局長宛てに報告が提出された。2014年7月5日に第3回研究報告会(愛知大学車道校舎)を開催した後、2015年2月28日に第4回研究集会(愛知大学車道校舎)、同年7月11日に第5回(愛知大学車道校舎)、2016年2月20日に第6回(愛知大学名古屋校舎)、同年9月10日に第7回研究集会(愛知大学車道校舎)がそれぞれ開催されたとの報告があった。

6. 新理事会選挙

加茂事務局長より、6月8日に2017-2018年度理事選挙にかかる開票活動についての選挙管理委員会としての報告があった。

「日本現代中国学会理事選挙実施規定(試行)」(学会ニューズレター42号、2014年6月掲載)の6.の規定をふまえ、理事長の指示の下で開票作業の結果を確定するとともに、25名の当選者(選挙理事)を決定した。そして事務局長は、該当者に対して、2017年-2018年度日本現代中国学会理事(任期は2016年10月から2018年9月まで)に当選した旨を伝達した。

25名の選挙理事を確定した後、この際、1名の選挙理事から辞退をしたいとの申し出があった。「日本現代中国学会理事選挙実施規定(試行)」は辞退者がでた場合の規定はないため、理事長は、当選理事をくり上げることはしないと判断した。結果、当選理事を24名、推薦理事を26名とするとともに、各部会に対して推薦理事候補者の推薦を依頼した。各部会から推薦理事のリストが提出されたのち、理事長はこれを確認した。

7. 幹事職について

学会規約第10条(5)にある幹事と、常任理事会の各部会の下に設ける幹事の選出方法について確認した。学会規約第10条(5)にある(全国)幹事は、同規約にあるとおり理事長が委嘱する。一方で部会の活動を遂行する上で必要に応じて設ける幹事は部会長が嘱託する(常任理事会に報告はする)。

【審議事項】

8. 新入会の承認

合計7名の新規の承認案件が提出され、承認した。

9. 2016年全国学術大会について

加茂開催校実行委員会委員（2016年）より、10月29日（土）と30日（日）に慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスにて開催を予定している2016年全国大会の準備状況についての報告があった。実行委員会委員長は田島英一総合政策学部教授、実行委員として加茂具樹総合政策学部教授と鄭浩瀾総合政策学部准教授が務めていることを説明した。会場の準備および共通論題、各分科会について承認された。

開催校実行委員会は、他の学会が開催する学術大会においてペーパーレス化が進んでいることをふまえて、今年度の全国学術大会は報告要旨集を作成しないことを提案し、常任理事会は了承した。

会員が利用する託児所の設置を検討しているとの報告があった。そのため、大会案内には必要性に関するアンケートを採ることについて報告があった。

出店する書店に対して適切な時期に連絡をおこない、取りまとめを幹事書店に依頼することを確認した。

■地方部会報告

□2016年度関西部会大会

さる6月4日、龍谷大学深草キャンパス和顔館地下一階において日本現代中国学会2016年度関西部会大会が開催された。参加者は96名であった。以下、各部会、共通論題それぞれについて概要を報告する。

【文学・芸術分科会】

第一報告：阿部沙織（関西学院大学・非）「虹影『K（英国情人）』試論—交錯する中国/女性へのまなざし」は、ジュリアン・ベルと凌叔華という実在の人物に取材した1999年の小説『K』およびその改作『英国情人』（2003年）を、事実と虚構との関係や、複雑に交錯する視点などから論じた。コメンテータ（濱田麻矢会員）やフロアとのやりとりにおいては、モデルの凌叔華について、あるいは小説の持つ可能性について様々な議論が行われた。

第二報告：林麗婷（同志社大学・院）「文学における日本留学—南武野蛮『新石頭記』を中心に」では、1909年に出版された南武野蛮『新石頭記』を日本留学小説として捉え直す試みであった。林氏は、これまでは評価が低かったこの小説を留学小説、さらには留学指南書として捉え直し、テキストを詳細に分析した。コメンテータ（山田敬三会員）からは林氏や『新石頭記』についての紹介・補足が行われ、また建設的な意見も提示された。

第三報告：岡野翔太（大阪大学・院）「戦後日本華僑と「新中国」音楽—台湾人と大陸引揚者の遭遇」では、「新中国」の音楽の日本への伝播に引揚者が関わっていたこと、そしてそこには「新中国」に共感する台湾出身者も関わっていたという事実が述べられた。それに加え、台湾の作曲家・許石の「南都之夜」が「新中国」を支持する日本華僑によって「我愛我的台湾」

として歌われていたことが示された。コメンテータ(西村正男会員)は日本の「うたごえ運動」に関する研究を踏まえるとよいのではないか、などの指摘がなされ、フロアとも活発な議論がなされた。

【歴史分科会】

第一報告：菊池俊介(立命館大学研究員)「戦後中国における漢奸処理条例の解釈と運用をめぐる問題」は、日中戦争期に対日協力に携わった経験をもつ中国人たちが戦後中国社会の再建という新たな状況のなかでどのような処遇を受け、彼らの過去がどのように位置づけられたのかについて、国共両党の「漢奸処理」に関する戦時政策と戦後の条例を検討する。コメンテータ(馬場毅会員)から、戦後華北社会の展開との関連、判例や施行細則について問われた。またフロアから、国史館所収史料などによって条文解釈の段階から本格的な政治過程分析に深める可能性が示唆された。

第二報告：団陽子(神戸大学・院)「敗戦国日本の残存艦艇分配問題をめぐる中華民国政府のスタンス」は、連合国ならびに米国による対日賠償要求政策の策定と実施に対して、中華民国政府はどこからどのような影響を受け、いかなる意思決定をしたのかについて、台北の国史館・近代史研究所所蔵史料に拠りながら検討する。中華民国政府は、自国の海軍建設という目的にとって合理的な判断がなされたとする。コメンテータ(石黒亜維会員)は、連合国の主体は何か、賠償における残存艦艇問題の位置づけ、先行の殷研究との関係、ソ連要因など10点を提示した。当該研究の意義についてさらなる熟慮を促された。

第三報告：和田英男(大阪大学・院)「内モンゴル自治区における反右派闘争：『内モンゴル日報』を中心に」は、1950年代中国政治史を、国籍保持者あるいは憲法が規定する国家の構成員としての「公民」の存在からの構築を試みる。報告では、反右派闘争において「公民」としての個人が現実の政治舞台からどのように排除されていったのかについて、内モンゴル自治区の事例を党自治区委員会機関紙『内モンゴル日報』の記載に拠りながら検討した。コメンテータ(馬場毅会員)から、反右派闘争と「公民」の関係、『内モンゴル日報』の資料的価値、報告が注目する榮祥の典型性について、またフロアから、中央・地方関係の含意、民族地域としての内モンゴルの特質について質問がなされた。

【社会・環境分科会】

第一報告：胡毓瑜(大阪大学)・三好恵真子(大阪大学)「舟山における漁民の実情とそれに基づく漁業資源管理制度の執行方式に関する考察」は、中国有数の漁場である舟山では漁業資源が激減していること、その原因を漁民に対するアンケートや聞き取り調査により把握し、現行制度の漁獲量制限、禁漁区の設定などの政府による制限策は効果を発揮しておらず、漁民の基本生活を保障した上で、制度を守れば奨励する方式が望ましいとの報告がなされた。これに対し、漁民保護の視点からの考察はよいが競争しない状況を作り出すことが大切であること、漁獲量は正確に把握できているのか、補償制度のみでよいのか、補償の資金をどうするのかなどの意見が提示され、議論が行われた。

第二報告：南玉瓊(立命館大学・院)「朝鮮族の深圳市への移動とエスニック・コミュニティの形成」は、深圳朝鮮族コミュニティは民族アイデンティティを確認させながらビジネスを推進する役割を果たしており、広東省朝鮮民族連合会とOKTA深圳支部がそれぞれ文化的役割と経済的役割を分担して、相互に機能を強化しているとの見解が提示された。質疑では、東北

三省、青島を調査対象とする先行研究と深圳を対象とする本研究について、青島では民間団体に政府機関を組み入れていく動きがあるのに対し、深圳では朝鮮民族連合会も OKTA もまだ団体として政府に登録されていないという差があること、国家と地方政府から離れた形での団体活動の困難さ、朝鮮半島からの労働者の流入、中国における都市民族工作との関係について指摘があり、いくつかの新たな課題が明らかとなった。

第三報告：焦従勉（京都産業大学）「ダム事業をめぐる中国の環境ジレンマ—怒江ダムを事例に」は、2003年に電力開発促進を目的に企画された怒江ダムは、多くの NGO 団体・専門家、環境行政部門及び移転住民の反対によって、地方政府の政策転換をもたらし、自然保護と観光の両立を図る国家公園計画が浮上したことが報告された。これは中国における参加型環境ガバナンスの成功事例と言えるが、国家エネルギー政策の方針が変更しておらず、依然として多くの河川で大型ダムを建設する予定であり、経済成長、環境保全とエネルギーの安全保障の同時実現を目指す中国は大きな環境ジレンマを抱えていると指摘した。質疑では、水力発電は初期投資が大きくなり、必ずしもトータルなコストが下がらない場合も多いとの報告内容について、十分な検証になっているのかとのコメントがあり、さらに実証的に研究を進めることが確認された。

【共通論題 シンポジウム】

今年「流動化する中国の行方」と題して共通論題のシンポジウムを実施した。北川秀樹関西西部会代表の挨拶に続き、まず経済について厳善平会員が「新常态の中国经济とその行方」と題する報告を行った。中国经济の現状と人口動態をめぐる様々なデータを示し、中国经济の今後を考える上で興味深い論点を提示した。続いて思潮に関して水羽信男会員が「リベラル思潮をめぐる歴史的考察」と題する報告を行った。中国の体制内で改革を目指すリベラル派知識人・俞可平の「善治」という概念の持つ意味について歴史的考察がなされた。三つ目の報告は松村嘉久会員による社会に関する報告「中国人のモビリティの変容」であった。中国人の流動性、特に近年の国内・海外旅行の動向が今後の見通しとともに紹介された。最後の報告は秋山珠子氏の映画に関する報告「カルチュラル・アサイラム—中国インディペンデント・ドキュメンタリーの位相空間」で、映像を用いながら中国のインディペンデント・ドキュメンタリーに関わる人々が抑圧と抵抗という二分法では説明できない一種のアサイラムの構築を試みていることが紹介された。

各報告者に対しては、それぞれの立場から多くの質問が寄せられ、活発な議論がなされた。

□2016年度西日本部会研究集会

2016年6月18日（土）、西日本部会は西南学院大学西新キャンパス学術研究所大会議室にて定例の部会研究集会を開催した。当初、本年度の会場は熊本学園大学を予定していたが、4月14日ならびに16日に発生した熊本地震による大学施設の被害発生に伴い、急遽、西南学院大学に会場を変更することになった。

今回の研究集会では計8本の報告が行われ、福岡周辺の大学のみならず、鹿児島や名古屋などからも報告者の参加があり、部会をまたいだ学会会員の交流を深める貴重な機会となった。以下、各報告のテーマならびに概要、質疑応答の内容を簡単に紹介したい。

①武井義和会員（愛知大学東亜同文書院大学記念センター）の報告「孫文支援者・山田純三

郎の革命派への関与とその実態について—革命派の広東省の資源開発を目指す動きを中心に—is、広東軍政府期の孫文ら革命派による広東省の「翁源水電計画」ならびに「含油頁岩開発計画」を事例として、孫文の支援者である山田純三郎が、開発資金の日本からの調達をめぐって「対日交渉窓口的役割」を果たしたことを「山田家資料」ならびに外務省外交史料などから明らかにしようとしたものである。質疑応答では、山田による孫文支援が、その革命理念に共鳴してのことなのか、あるいは在華権益の獲得にその目的があったのかなどの質問があり、さらには晩年の孫文の「対日依存」に関する評価などが議論された。

②和田英穂会員（尚絅大学）の報告「台湾の戦後処理における日本人、台湾人、台湾華僑」は、台湾における対日戦犯裁判の検討を通じて、戦後、日本人、台湾人、そして台湾華僑（植民統治時代に台湾に居住した中国籍の華僑）がそれぞれどのような「立場」で「裁かれた」のか、あるいは「裁かれなかった」のかという点が考察された。さらに、かつて「日本人」であった台湾人警察官が、戦後、国民政府によって戦犯として「裁かれた」事例や、「東港鳳山事件」（抗日運動弾圧事件）が国民政府によって「無視」された事例などが台湾人の国民政府認識に与えた「負の側面」についても言及がなされた。質疑応答では、報告者が新史料に基づき明らかにした「東港鳳山事件」と戦後に発生した「報復事件」（潮州郡特高警察課長仲井清一殺害事件）の関係などが議論された。

③横山政子会員（志學館大学）の報告「大躍進時期における食糧不足と農村女性の役割」は、効率化を追求するために実施された人民公社における「共同食堂」の運営が、各家庭の女性を動員したことから、女性が「共同食堂」と「家庭の台所」において二重の「労働」にさらされたことを明らかにし、結果的に労働効率上も燃料効率上も「非効率」が発生したとし、大躍進運動における「非効率」性の新たな一面を指摘するものであった。質疑応答では、大躍進運動期における餓死者の地域間格差や報告者による今後の中国東北地域における檔案調査の可能性（近年の閲覧制限の強化）などについて議論が行われた。

④新谷秀明会員（西南学院大学）の報告「龍瑛宗の戦後作品に関して—日本敗戦後のパラダイムシフト」は、日本敗戦後の国民党の言語政策にも関わらず戦後も日本語創作にこだわり続けた龍瑛宗に照準を合わせて、その創作における「戦略的スタンス」が戦前と戦後においても通底するものであると論じた。質疑応答では、晩年の作品「媽祖宮の姑娘」の評価に関する質問等が出され議論がおこなわれた。

⑤呉紅華会員（九州産業大学）の報告「周作人と明治大正期の日本児童学—高島平三郎との関係を手掛かりに」は、これまであまり取り上げられてこなかった周作人の児童文学ならびに児童教育学について、明治・大正期の日本児童学研究や童話運動、なかでも特に児童教育心理学者高島平三郎が与えた影響について、数多くの周作人の作品を引用しつつ、考察を加えたものである。質疑応答では、数多くの引用資料の背景についての補足説明や魯迅との関係などについての質問が出された。

⑥下野寿子会員（北九州市立大学）の報告「福建省の経済政策と対台工作」は、「台湾との強い紐帯」を掲げる福建省と台湾間の閩台経済協力プロジェクトにおける「福建自由経済区」や「台湾農民創業園」などを事例として紹介しつつ、閩台関係の実態に考察を加えた。質疑応答では、福建省という「地方」としては、「台湾」を盛り込む形でプロジェクトを企画した場合、中央から予算を獲得しやすいのではないかという点などについて、意見交換が行われた。

⑦横澤泰夫会員（元熊本学園大学教授）の報告「反骨のジャーナリスト・戴煌のこと」では、毛沢東の神格化と中国共産党の官僚特権の批判を続けた元新華社高級記者戴煌が今年2月19日に亡くなったことを受け、反右派闘争による失脚から文革後の「平反」、さらには近年の『氷点週刊』発禁処分に対する厳重な抗議活動など、その事績が詳細に跡づけられ、さらに「公共知識分子」としての歴史的評価について考察が加えられた。さらに報告の最後では、戴煌の息女である戴為偉から報告者に送られてきた「亡き父」に関する評価を綴ったメール文面も紹介された。

⑧大田千波留会員（九州大学大学院）の報告「社会的資源としての党員と大学生—広東省KZG市WGK大学の事例から」は、「共産党入党」という学生の「政治的実践」について、丹念な現地におけるフィールドワークに基づき、「なぜ学生は中国共産党に入るのか」という問題について、いわゆる「三好学生」という概念を定義しつつ、説明しようとしたものである。質疑応答では、分析の基準となる「三好学生」という概念における「優秀である」ということの定義の曖昧性について多くの議論が行われた。

なお、第1報告から第3報告までは大澤武司会員（熊本学園大学）が、第4報告ならびに第5報告は間ふさ子会員（福岡大学）が、第6報告から第8報告までは和田英穂会員（尚絅大学）がそれぞれ司会を担当した。報告終了後には部会総会ならびに懇親会が行われ、部会の交流を深めることができた。〔記：大澤武司会員〕

■「加藤弘之『中国経済学入門』との対話」のご案内

（中国経済経営学会・アジア政経学会・日本現代中国学会合同企画）

【趣旨】

2016年8月30日、加藤弘之神戸大学教授が亡くなった。61歳の誕生日を目前にしての余りに早い死であった。不幸中の幸いは、加藤教授が「私にとっての最高傑作」と自負する『中国経済学入門』（名古屋大学出版会、2016年）を亡くなる数か月前に遺していったことである。中国の独自性を解明する「学」の樹立をめざした本書のなかで、加藤教授は「筆者の思考がいまだ荒削りな段階であり、より洗練された理論的な叙述は、後進に委ねるほかない」と書いている。死期が近いことを意識し、本書の問題提起を、遺された研究者たちが受け止めて発展させてほしいという強い願いが込められた一文である。

『中国経済学入門』は、曖昧な制度にこそ中国の独自性と発展性の核心があるという仮説のもと、土地の集団所有、地方政府間の競争、企業の混合所有制、中国式のイノベーションなどの事例から、曖昧さが中国の発展に積極的な意義を持っていることを例証している。他方で、汚職と格差の問題に、曖昧な制度の持つ弊害を見ている。

『中国経済学入門』は、中国研究によって経済学を革新しようという野心的な目標に向けた第一歩と位置づけられており、タイトルの「入門」にはその意図が込められている。加藤教授が遺したこのバトンをどう受け取るのか。

本企画分科会では、『中国経済学入門』をどう読むか、そのメッセージをどう受け取ったのかを学問分野や研究対象地域の枠を超え、さまざまな角度から議論したい。本分科会ではいわゆる「報告者」は『中国経済学入門』で、登壇者はすべてそれに対するコメンテーターという

位置づけである。登壇者以外からも『中国経済学入門』に対する積極的な発言を期待する。

なお、本企画分科会は中国経済経営学会の大会のなかで開催されますが、アジア政経学会と日本現代中国学会の会員も自由に参加できます。

日時 2016年11月6日(日) 13:30~16:00

場所 慶應義塾大学三田キャンパス 西校舎 527 教室 (予定)

<https://www.keio.ac.jp/ja/maps/mita.html>

登壇者：毛里和子（早稲田大学名誉教授）

中兼和津次（東京大学名誉教授）

菱田雅晴（法政大学）

川端 望（東北大学）

司 会：丸川知雄（東京大学）

■日本現代中国学会事務局あて寄贈図書・雑誌

嵯峨隆『アジア主義と近代日中の思想的交錯』（慶應義塾大学出版会、2016年6月）

西口敏宏・辻田素子『コミュニティー・キャピタル—中国・温州企業家ネットワークの繁栄と限界』（有斐閣、2016年6月）

エリック・シッケタンツ『墮落と復興の近代中国仏教—日本仏教との邂逅とその歴史像の構築』（法藏館、2016年7月）

毛里和子・毛里興三郎訳『ニクソン訪中機密会談録（増補決定版）』（名古屋大学出版会、2016年8月）

青木昌彦・岡崎哲二・神取道宏『比較制度分析のフロンティア（叢書《制度を考える》）』（NTT出版、2016年9月）

=====

日本現代中国学会事務局

〒166-8532 東京都杉並区和田3-30-22

大学生協学会支援センター内 日本現代中国学会事務局

TEL:03-5307-1175

FAX:03-5307-1196

genchu@univcoop.or.jp 郵便振替:東京 00190-6-155984

広報委員長:王雪萍（東洋大学）

ニュースレター編集:菅原慶乃（関西大学）

日本現代中国学会HP: <http://www.genchugakkai.com>

=====